
僕と彼女の…

akinori

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と彼女の…

【Nコード】

N9923E

【作者名】

akinori

【あらすじ】

ある日、異形なモノに追われた少年は彼女に出会う…

1、出会い

「ハアッ！ハアッ！」

僕は追われていた。

バイト帰りの途中で野良犬と目があった瞬間に追いかけられた

犬：いや、犬ではなく犬らしきモノに僕は理由も無く襲われそうなのっている。

必死で逃げ回った足は乳酸が溜まり、自分の足とは思えないほど感覚がなくなり今にでもこけそうな足取りだが、それでも僕は走りつづけた。

普段から運動なんかしてない僕の体力は1，2分全力で走っただけで過呼吸状態の一手手前に陥り、とうとう躓き転んでしまった。

転んでしまった僕にはもう体を起こすだけで精一杯で立ち上がる力なんか残っても無く、目の前に迫ってくる犬らしきモノは徐々に近づいてきた。

目の前に近づいてきた犬らしきモノはパニック状態で走りまわっていた時には気づかなかったが、普通の犬には何も無い額に三つめの眼がそなわっていた。

異形の犬はまるで罠に掛かって身動き出来ない獲物をゆっくり仕留めるかのように近づきは僕は死を覚悟した。

瞬間

目の前の異形の犬は急に赤く燃え上がり断末魔のような鳴き声はこの世ものとは思えなかった。

異形の犬は跡形も無く消えていった…

「何だったんだ今は…」

僕は興奮しながらも精神状態を安堵にもっていこうとした瞬間に後ろに気配を感じた。

「うわぁ！」

「きゃっ!!！」

僕の間抜け声と反対に直接頭に透き通る綺麗な声が同時に聞こえた。

「ご、ごめんなさい。驚かすつもりはなか…って大変、腕に怪我が！」

「えっ、た、多分、さっきこけた時に擦り剥いたんだと思う。」

正直、腕の怪我なんかどうでもよく、僕自身は別の問題に直面していた。

透き通るような声の持ち主は綺麗な女の子だった。

昔から僕は女の子を目の前になると緊張してしまい、相手が綺麗であればあるほど緊張してしまう。

所謂、女性恐怖症である。

そんな目の前の女の子は目鼻立ちがはっきりしており肩にかかるぐ
らいの艶のあるストレートな髪で幼い印象を与える顔だ。え

「取り敢えず手当てしないと…動かないで下さいね。」

「は、はい!!」

彼女は雪のように綺麗な手で怪我した僕の腕を持ちながらも片方
の手は怪我した患部に近づけて何か喋りだした。

「治癒の力を司る水の精霊よ!この者に祝福したまえ!」

彼女は呪文みたいな事を唱えた瞬間に僕の怪我した腕はみるみる治
っていった。

「す、凄い…」

僕は感嘆な声を上げることしか出来ず、目の前で起きた現象は神秘的で怪我だけではなく未だに興奮状態だった精神が落ち着いていく
のを感じた。

そして、僕は急に眠気に襲われ抵抗出来ぬまま心地よい眠りについ
た。

2、目覚め

目を覚ました僕は、今、自分の居場所がどこにいるのかわからなかった。

僕が目覚ました場所は毎日寝起きしている部屋では無く、旅館みたいな古い日本家屋的で趣のある部屋だった。

もっと観察しようとする、障子の奥から足音が聞こえてきて、障子が開いた。

「あ、目が覚められましたか？」

現れたのは昨日の彼女である。

「いえ、すみません…あの…ここはどこなんですか？」

「ここは私の家です。」

僕はドキッとした。

女の子の家なんか今の今まで行ったことなどなく、自分には縁が無いと思っていたけど、捨てる神もいれば拾う神もいるって言葉が思い出され、僕にとうとう春が来たかってそんな妄想してると…

「すみません、私もお尋ねしても宜しいですか？」

僕はハッと正気を取り戻し、自分の名前を答えた。

「えと、工藤 修二っていいいます。」

「いいお名前ですね。私は朝倉 沙耶といいます。沙耶って呼びください。」

そういえば、お互いまだ自己紹介してなかったんだなって思ったけど、そんな余裕なんかなかったよなみたいな事を考えてるうちに：

「どうやら眼を覚ましたようじゃのう。」

いつの間にか柔和な笑顔の老人が現れた。

「あっ、おじいさま！おはようございます。」

「おはよう、沙耶。どうやら、その少年も目を覚ましたようじゃのう。」

沙耶と老人との会話で気が付いたが、僕はどうやら一晩中眠ってたんだ。

「申し訳ございません。一晩泊めてもらったみたいで。」

「気にすることはないぞ。確かに沙耶が連れて帰ったきたときは驚いたがのう。」

「連れてきた？」

修二はポカンとした表情になった。

修二は昨日の出来事を鮮明に覚えてるが、少なくとも昨日、あの場

には修二と沙耶しかおらず、目の前にいる沙耶は華奢で全体的に細めの印象を与えてるが、主張する部分は主張している。

それに対して僕は、最近の運動不足で若くしながらお腹が主張し始めてきて、少し小柄な体型ながらも体重は重い方だと思う。

「あの：気絶してたんで覚えてないんですけど、そちらのおじいさまに運ばれたんですか。」

修二が申し訳ないなさそうに聞いてみたが：

「すいません。そのことについてあたしは謝らないといけないのです。」

急に沙耶が神妙な面持ちで謝り始め、修二は急な展開についていけず、何故、彼女が謝ってるのか全く検討がつかないでいた。

「あなたの腕の怪我を治したあと、あなたは急に強烈の眠気に襲われて眠りにはいりましたよね？」

「うん：眠くなったの確かだけど、それよりも怪我を治したときに言ってた呪文みたいなものって何？」

修二にとって昨日の眠くなった原因は必死に逃げ回った疲労と緊張やら興奮が解けたからつい眠ってしまったんだと考えていたので、眠りについた原因より呪文の正体の方が興味があった。

「その事についても一緒に説明します。」

沙耶は今までみたいな、どこか危なげな純粋な女の子にみえたが、

今の沙耶は凜とした表情で全てのものを圧倒するような雰囲気醸しだしている。

「まず、私は魔法使いなのです。」

「魔法使い？」

「そうです。昨日、あなた怪我を治したのも魔法の一つです。」

突然のカミングアウトに修二は驚くことも出来ずに呆気にとられていた。

「魔法使い……って、よく小説や映画に出てくるような感じの？」

修二は未だに信じられないって感じの様子で沙耶に聞き返した。

「そうですね。大体そんな風に捉えてくれたらわかりやすいです。」

「じゃあ、そのあと急に眠ってしまったのも魔法の一つなの？」

沙耶の答えに対して、修二もやや興奮気味になり質問を続ける。

「その通りです。落ち着いてあなたに事の説明をするにはこの方が賢明かと思ひまして……」

そう言いながら沙耶は申し訳なさそうに顔を俯けた。

そんな沙耶を見てると修二は目の前の女の子が急に可愛く思えてきて、自分でも不思議に思いながら、自然に言葉を発した。

「信じるよ。」

「えっ!？」

沙耶は俯けてた顔を上げて修二を見つめた。

「今の話を信じるよ。」

修二はこの家に来て初めて笑顔になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9923e/>

僕と彼女の…

2011年10月5日11時42分発行